

秋季入学（九月入学）に関する検討の経緯

1. 概要

- 昭和60年代から現在に至るまでの間において、秋季入学（九月入学）について公開の場で検討した主な議論は2. のとおり。
- これらの議論は、①全ての教育段階についてその始期を秋とすることを検討したもの（昭和62年臨時教育審議会第四次答申）と、②特に高等教育段階についてその始期を秋とすることを検討したもの（平成10年大学審議会答申、平成19年教育再生会議第二次報告、平成25年学事暦の多様化とギャップタームに関する検討会議など）に大別することができる。

2. 秋季入学に関する検討の経緯

（1）昭和62年臨時教育審議会第四次答申

- 秋季入学制について、大学に限らず全ての教育段階について検討した上で、①夏休みを学年の終わりとすることで、効率的な学習・学校運営が可能、②国際社会との整合性、外国との交流拡大や帰国子女受け入れの円滑化、③家庭や地域、自然との触れあいなど、夏休みの活用、等の観点から「大きな意義がある」と評価。
- 一方で、直ちに秋季入学に移行することについては、「秋期入学制への移行は、国民生活全般へ及ぼす影響が大きいので、その成否は、この問題に関する国民ひとりひとりの理解と協力が得られるかどうかにかかわっており、最終的には、国民の選択と合意に委ねる必要があるが、現時点では必ずしも秋期入学の意義と必要性が国民一般に受け入れられているとはいえない。」としており、慎重な立場を示している。
- なお、同答申では移行の方式について、移行は全学年一斉に2年間に分けて行い、初年度は経過措置として6月入学とし、次年度から9月入学とする方式を例示している。

（2）平成10年大学審議会答申「21世紀の大学像と今後の改革方策について」

- 大学について、留学促進・入試複数回化の観点から検討し、セメスター制の導入について言及。

「学年暦の異なる諸外国への留学及び我が国への留学生の受け入れを促進するため、また、秋季（9月）入学をより柔軟に導入できるようにするため、学年の途中における入学」をより弾力的に認める。

「また、大学入学機会の複数回化という観点から、秋季（9月）入学の導入の促進を求める声もある。受験者の選択の幅を広げ、多様な学習計画を可能にするという点で秋季（9月）入学の導入による入学機会を拡大することも有効である。」

「学期ごとに授業が完結するセメスター制は、学習上の効果が高いだけでなく、外国を含めた他の大学との交流を容易にする一つの方策として有効であり、各大学における積極的な活用を推進していく必要がある。」

「（秋入学の試みと課題として）近年、秋入学など4月以外にも入学できる制度を導入している大学数は増加傾向にある。しかしながら、入学者数で見ると約2千人（全体の約0.3%）とまだまだ少なく、そのうち留学生が約7割を占め、日本人学生は極めて少数である。」

(3) 平成12年教育改革国民会議報告

「国際化を促進し、高校卒業後の学生に社会体験などの時間を与える観点から、大学の9月入学を多くの大学が実施するよう積極的に推進する。」

(4) 平成19年教育再生会議第一次報告

「既に約150の大学で行われている秋季入学（9月又は10月入学）を普及促進し、入学前の半年間に奉仕活動、ボランティア活動、海外支援活動等の多様な体験を通じ豊かな感性や徳目を身に付けるようにする。」

(5) 平成19年教育再生会議第二次報告

「国は、海外からの帰国生徒や海外からの留学生の要請に応えるとともに、日本版ギャップイヤー（※）などの導入による若者の多様な体験の機会を充実させる観点から、大学・大学院における9月入学を大幅に促進する。」

「さらに、国は、海外からの帰国生徒や留学生の希望に応じられるよう、国立大学について、次期中期目標策定の際、ガイドラインを示し、9月入学を積極的に受け入れる大学・大学院を支援し、全国立大学での9月入学枠の設定を実現する。私立大学においても9月入学枠設定を促進する。9月入学枠を設定する大学について、運営費交付金、私学助成等により支援措置を講ずる。9月入学と合わせて、セメスター制（半年間の学期ごとに授業が完結し、単位の修得認定を行う仕組み）の導入を促進する。

※日本版ギャップイヤー：3月末までに入学を決定した学生に、9月からの入学を認め、その間、ボランティア活動など多様な体験活動を行う猶予期間を与えるもの。また、4月に入学した学生に、9月までの間、多様な体験活動を認め、このような活動を評価して一定の単位を認める仕組み。」

(6) 平成25年学事暦の多様化とギャップタームに関する検討会議

- ギャップタームの意義や内容等について整理。
- 秋季入学に関する制度的な支障については特段の言及はない。セメスター制（2学期制）や4学期制により秋季入学は可能であるが、高校卒業後大学入学までの空白期間における家計負担の問題や、就職、国家試験等との接続といった課題が存在することが指摘されている。

(秋入学の試みと課題)

- 我が国の大学全体が秋入学に移行しようとした場合、
 - ① 欧米の大学の学事暦に合わせることができ、国際的に学生の流動性が向上
 - ② 高等学校卒業後から大学入学までの期間を活用した学修体験の豊富化
 - ③ 入試を年度末でなく、高校教育の成果をより適切に評価しえる時期に実施可能等のメリットがあると考えられる。

しかしその反面、高等学校の卒業時期を3月のままにして大学だけが全面的に秋入学へ移行するとなると、大学入学までの約5か月間の空白期間が生じ、若者がその期間を無為に過ごしてしまうおそれや家計負担が増してしまうという懸念が指摘されている。また、卒業時期が夏となってしまう、3月に卒業することを想定している現在の就職慣行、司法試験や医師国家試験をはじめとする公的な資格試験等の仕組みに合わないなど、様々な課題が指摘されている。